

漢詩を味わう

第136回



贈猫 陸游

裏鹽迎得小狸奴 塩を裏んで迎え得たり 小さき狸奴

盡護山房萬卷書 尽く護る 山房萬卷の書

慚愧家貧策勳薄 慚愧す 家貧しくして勳に策ゆること薄く

寒無氈坐食無魚 寒きにも氈の坐する無く 食に魚無し

塩をお礼につつんで、小さな猫を迎えることが出来た。

これからは書齋の万巻の書を鼠から守ってくれるだろう。

だが恥ずかしいことに、家が貧しく手柄に十分報いられず、

寒くても暖かい毛氈もなく、食べ物に魚を出すこともままならぬ。

《裏鹽》猫をくれた家に、塩を贈る風習があったという。「裏」は裏とは別字。

《狸奴》猫の雅称。

《山房》書齋。

今月は猫を詠んだ陸游の面白い詩を紹介します。
陸游（一一二五—一二〇九）は南宋を代表する詩人で、字を務観といい放翁の号で知られています。この詩は陸游五十九歳の作です。免官となり郷里の紹興で詠んだ詩です。

猫を詠んだ詩は、北宋以降見られるようになり、黃庭堅の「猫を乞う」や梅堯臣の「猫を祭る」が知られています。いずれもネズミの害から守ってくれる猫の働きを称えたものですが、陸游をはじめとして宋代以降の詩の題材が、身辺の瑣事まで広がったことも一因です。さらに陸游は自ら「六十年間萬首の詩」と言うほどの歴代屈指の多作家で、生涯で猫の詩を二十首余り作ったといえます。

大事な蔵書をネズミの害から守ってくれる愛猫の健気を称え、その手柄に十分に報いてあげられないことが申し訳ないと愛猫に呼びかけるこの詩は、やさしい愛情にあふれて微笑ましい詩です。

猫をもらい受けるのに塩を贈っていますが、当時の塩は専売制がとられ大変貴重なもので、それだけに猫も重宝されていたようです。陸游の一家は代々官僚を務め紹興の名門として知られていて、詩中の「山房萬巻の書」という表現も決して大げさではないようです。しかし、この詩を詠んだ当時の陸游は免職中で、道教の寺院を管理するという提拳という名ばかりの役職を与えられ、祠禄といわれる恩給のような薄給で生活していました。その苦しい生活の中で、猫を飼って生活していたわけです。

「寒きにも氈の坐する無く」は杜甫の詩（戯れに鄭広文虔に簡し…）に「坐客寒きにも氈無し」を踏まえ、さらに「食に魚無し」は戦国時代の孟嘗君の食客だった馮驩が待遇改善を求めて、長剣（剣）を叩いて「長剣よ帰来らんか、食に魚無し」とうたった故事（史記）に同様の表現があります。

余談になりますが、恩師大島崑山先生も娘娘弥（ニヤニヤヤ）と名付けた猫を飼っていた大の愛猫家で、猫の俗称である「銜蟬」という別号をお持ちでした。先生にあやかり私も十年前まで家猫を飼っていましたが、生涯一猫と決めて今はいません。因みに陸游の飼っていた猫の名前は「雪児」ということです。

参考文献・陸游詩選（岩波文庫）・中国詩人選集陸游（岩波書店）・中国名詩集（岩波書店）

道路本限りなし 又た応に何れの処にか逢うべき 流年虚しく擲つこと莫れ 華髪相容さず 野渡波は月を揺し 寒城雨は鐘を翳にす 此の心去馬に随い 追通として重峰を過ぎん

之後本限りなく逢ふべき
 流年虚しく擲つこと莫れ
 華髪相容さず
 野渡波は月を揺し
 寒城雨は鐘を翳にす
 此の心去馬に随い
 追通として重峰を過ぎん

《大意》道路というものは、元来はてしないもの。またいつどこで出逢えるものやら。過ぎ行く年月を、いたずらに過ごすことはなさるな。

白髪はいかなる人をも容赦はしないものだから。野辺の渡し場に、水面の月影は波に揺れ動き、ひっそりとした城あたりからの雨にかげりを帯びる。この思い、去り行く君の馬とともに、はるか彼方たわわなる峰々を越えて行くことであろう。

(方干詩・途中にして孫璐に別る)

寒風枯條を払い 落葉長陌を掩う

寒風拂枯條
 落葉掩長陌

方干詩

寒風拂枯條
 落葉掩長陌

方干詩

《大意》寒風は枯れた枝を払い、落葉は長くつづくあぜ道を掩う。(陶潜詩句)

読み
積水極むべからず（水が深く積もった海は極める事はできないのだから）

積水
可極
不

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について
 ・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
 ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「送秘書官晁監日本国」

積水不可極

積水極む可からず

安知滄海東

安んぞ滄海の東を知らん

九州何處遠

九州何れの処か遠き

萬里若乘空

萬里空に乗ずるが若し

向國唯看日

国に向つて惟だ日を見る

歸帆但信風

歸帆但だ風に信す

鰲身映天黑

鰲身天に映じて黒く

魚眼射波紅

魚眼波を射て紅なり

郷樹扶桑外

郷樹扶桑の外

主人孤島中

主人孤島の中

別離方異域

別離方異域なりて

音信若爲通

音信若為か通せん

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

可積
可極 水不

可積
可極 水不

次号課題

隸書

海安
海東 知滄

可積
可極 水不

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

いず
安んぞ滄海の東を知らん

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

| | | | | | |
|---------|--|--------|--|--------|--|
| 支 部 | | 順 位 | | 氏 名 | |
| かへり花 | | | | | |
| 暁の月にちりす | | | | | |

蕪村

和泉溪石先生書



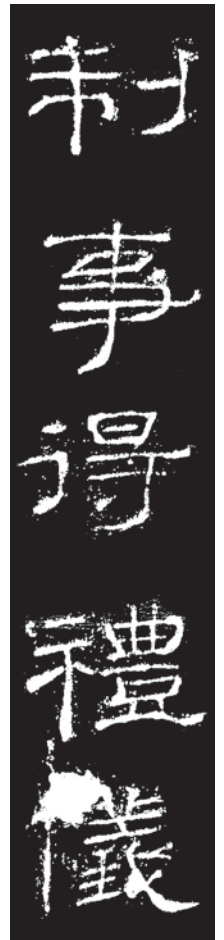
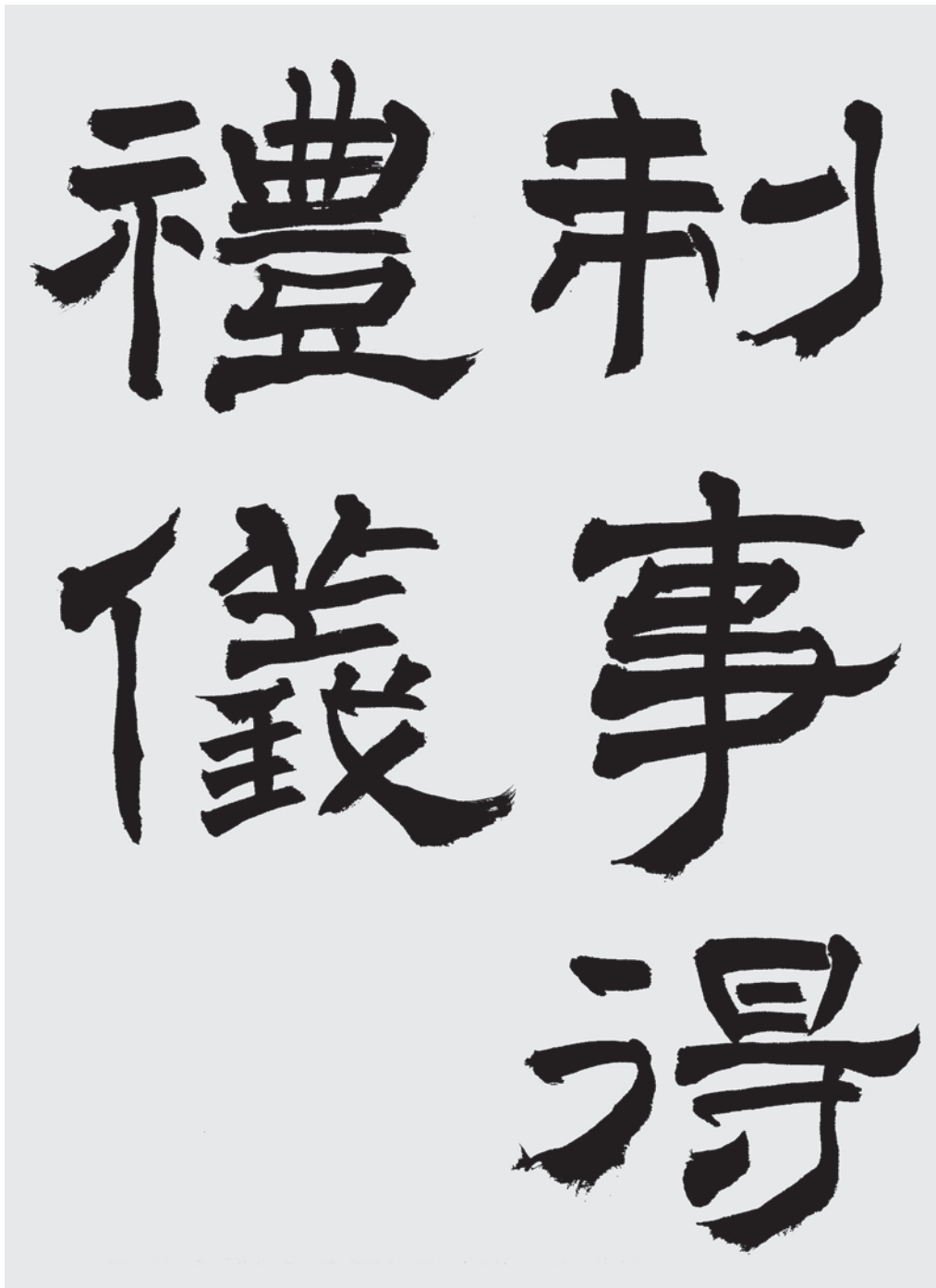
佐藤象雲書

音

キユウシユウセキ
ヒヤクケンシンヘイ

略解

黄・青・徐・楊・兗・荆・豫・梁・雍の九州を禹は駆け巡り
治め、秦の始皇帝は諸国を統一して百郡を秦の領土とした。



制。事得禮儀。

■ 禮器碑^{らいきひ}

(後漢・西暦一五六年)の臨書 (21)

象雲臨

【制事得禮儀】

今月は繁画な字が続き、特に横画が連続しています。その中で横画に絡む縦線が多彩で非常に変化に富んで表情が豊かです。隸書の原則は水平垂直ですが、実際に隸書碑の数々を見ると、特に縦画が垂直に終始している古典は皆無です。波磔を持つ横画にまず注目してしましますが、縦画の変化は非常に結構において重要なポイントになっています。

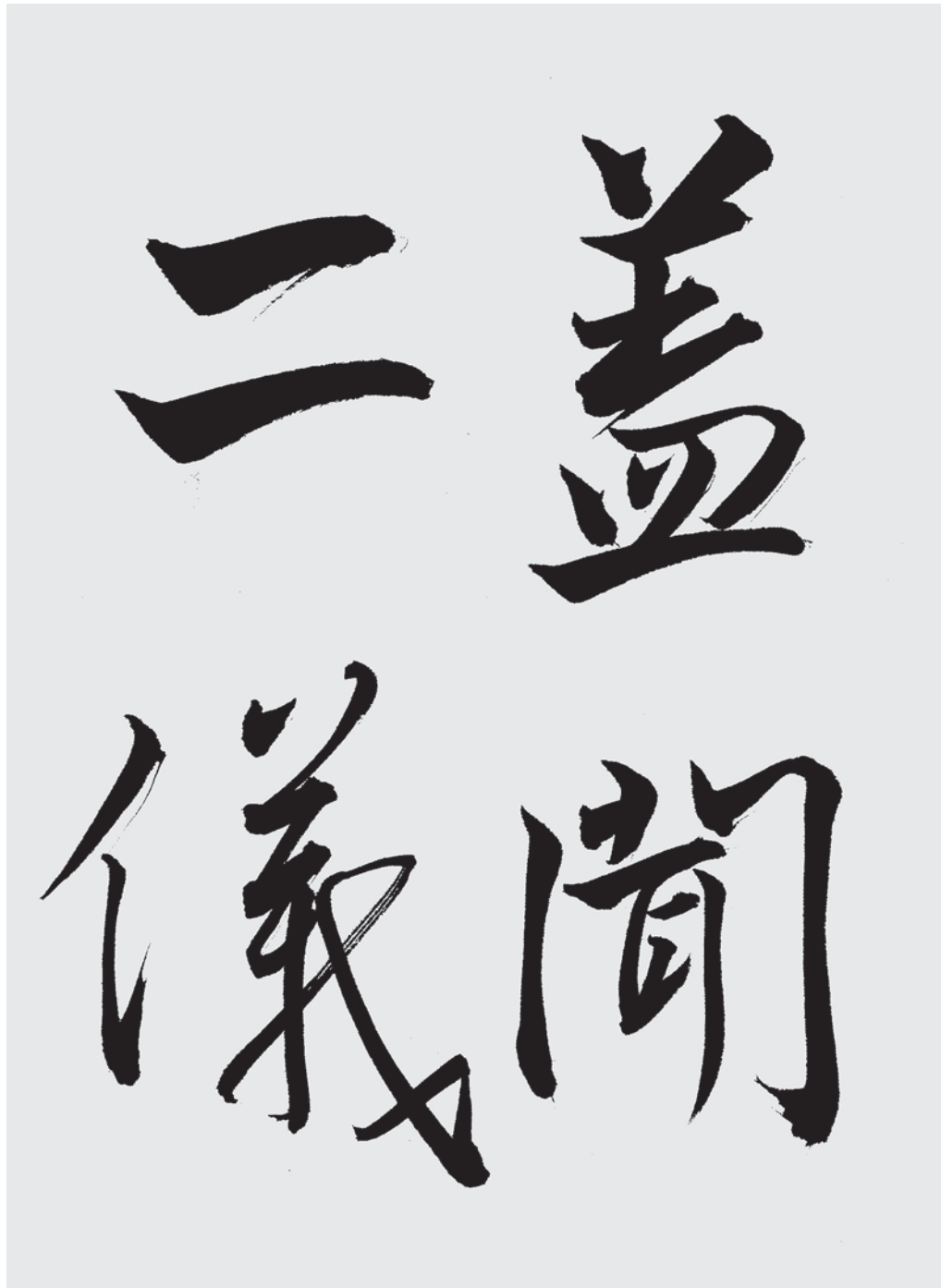
【制】この字は禮器碑の碑陽面に六字あります。他碑では活字にある第一画の短い払いが本碑では三字に見ることが出来ません。碑面の摩滅による欠損か定かではありません。

【事】上部「口」の縦二画は右に倒れ、「ヨ」の右縦画は篆書のように下の横画と結びついて孤を描いています。

【得】偏旁簡にゆとりがあります。横波は軽めに。

【禮】旁の「曲」の縦画は向勢に、「口」はやや左に流しています。

【儀】旁の上部は漢碑の中でも珍しく金文の羊の耳の形です。横画はやや右上がりですが、右波磔でバランスをとっています。



蓋^{けだ}し聞く二儀 (像有り)

象雲臨

■王羲之・集字聖教序 (唐・西暦六七二年) の臨書 (6)

『蓋聞二儀』

王羲之の書は唐太宗李世民によって広く流布されたことをご承知のとおりです。李世民が皇帝の権威によって王羲之の書を集し権威付けされたわけです。さて王羲之(三〇三―三六六)は東晋の書家で唐太宗とは約三〇〇年の隔りがありますが、その間の王羲之の評価についてはどうだったのでしょうか。王羲之の師は衛夫人と伝えられ、衛夫人から後漢の蔡邕の字を学び、さらに鍾繇の楷書を学び、張芝の草書を学んでいます。王羲之は自ら「吾が真書(楷書)は鍾に勝り、草は故より張に減ず」と言っていて、これが当時の一般的な評価だったと見てもよいと思います。しかし、時代の好尚の違いがあり、これを書の優劣に繋げることが大変危ういことです。

王羲之書法の偉大な点は、秦漢の篆隸を淵源として、東晋当時に隆盛していた張・鍾の書を継承して発展させ、新境地を開いたことにあります。それだけに王羲之を学ぶことは難しさが伴います。

今月は「蓋聞二儀」の四文字を臨書します。最後の儀は前三字と異なり、細線で連綿させています。